

# いち 井 ぎ 木 遺 跡



1 9 9 7

玖珂町教育委員会

# 市井木遺跡の発掘調査にあたって

玖珂町教育委員会

教育長 月永 哲夫

玖珂町千束市井木遺跡は、岩国市川西、有限会社ムラカミ地所（代表取締役・村上邦夫氏）による霊園建設に伴い発見されたものでありますが、山口県教育委員会にお願いし、平成8年5月15日から約2週間をかけ、発掘調査をして頂きました。何分にも小範囲の調査のため残された課題もありますが、円形竪穴式住居1基、段状遺構2基、柱穴などが検出され、これは、弥生時代後期（約1800年前）のものと考えられることが判明いたしました。

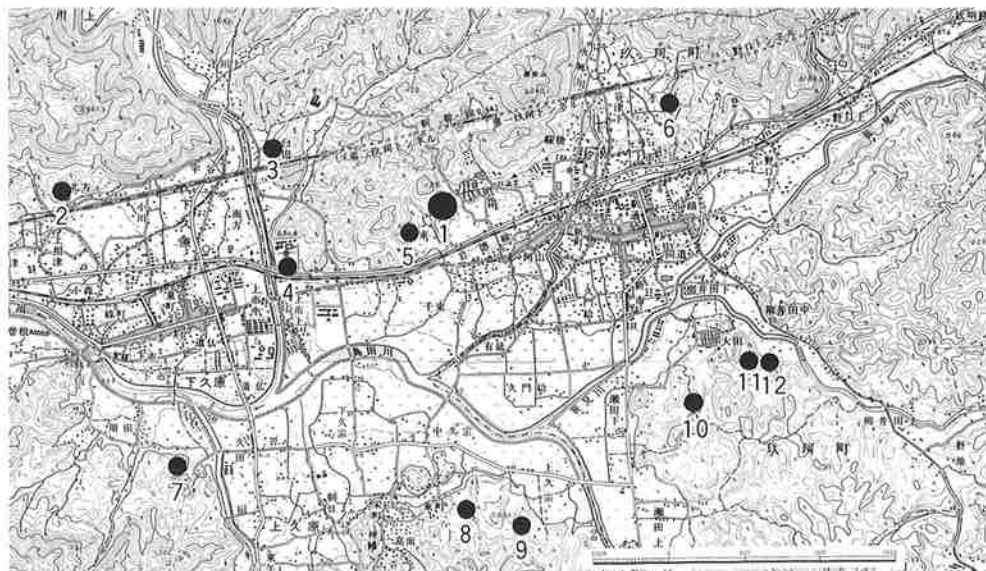
今回の発掘調査にあたり、大変ご多用な中を、特にお差繰りいただき発掘調査にあたって頂きました、山口県埋蔵文化財センター、山口県文化財保護課の先生方をはじめ、ご協力を賜りました、有限会社、ムラカミ地所並びに地元の皆様方に厚くお礼を申し上げごあいさついたします。

## 例 言

1. 本書は、霊園建設に伴い事前に発掘調査を行った、山口県玖珂郡玖珂町千束所在の市井木遺跡の調査報告書である。
2. 調査は（有）ムラカミ地所の委託を受けて、玖珂町教育委員会が主体となり、山口県埋蔵文化財センターの技術援助のもとに実施した。
3. 方位は、国土座標（第3座標系）の北で示した。
4. 本書中の挿図・写真は、山口県埋蔵文化財センターの乗安・岩崎・石井が作成した。
5. 本書の執筆・編集は、石井が行った。

## はじめに

遺跡は霊園建設に伴う試掘によって発見され、（有）ムラカミ地所との協議の結果、発掘調査を行うことになった。調査面積は350㎡で、調査は平成8年5月15日より実施し、5月31日に終了した。



- 1 市井木遺跡
- 2 白山遺跡
- 3 白田遺跡
- 4 筏山遺跡
- 5 千束遺跡
- 6 大伴遺跡
- 7 用田遺跡
- 8 河池遺跡
- 9 上久宗遺跡
- 10 畑岡遺跡
- 11 清水遺跡
- 12 柳井田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の主な弥生時代の遺跡

## 位置と環境

市井木遺跡は、玖珂郡玖珂町千東に所在する。遺跡は島田川上流域に広がる玖珂盆地北端の丘陵上にある。盆地内には数多くの弥生時代の遺跡が知られており、それらは盆地を取り巻くように丘陵上や微高地上に分布している。特に山陽自動車道建設に伴い発掘調査が実施された清水遺跡や畑岡遺跡は、県内でも代表的な後期の高地性集落である。

## 調査の概要

調査区は、標高99mを最高点とする丘陵斜面で、現況は山林であった。まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構検出、掘り込みを行った。検出した遺構は竪穴住居跡1基、段状遺構2基、土坑1基、柱穴で、遺構の残りは概ね良好であった。地形からみて、遺跡の中心は現在墓地になっている調査区南の尾根上にあるものと思われる。なお地山は花崗岩バイラン土である。

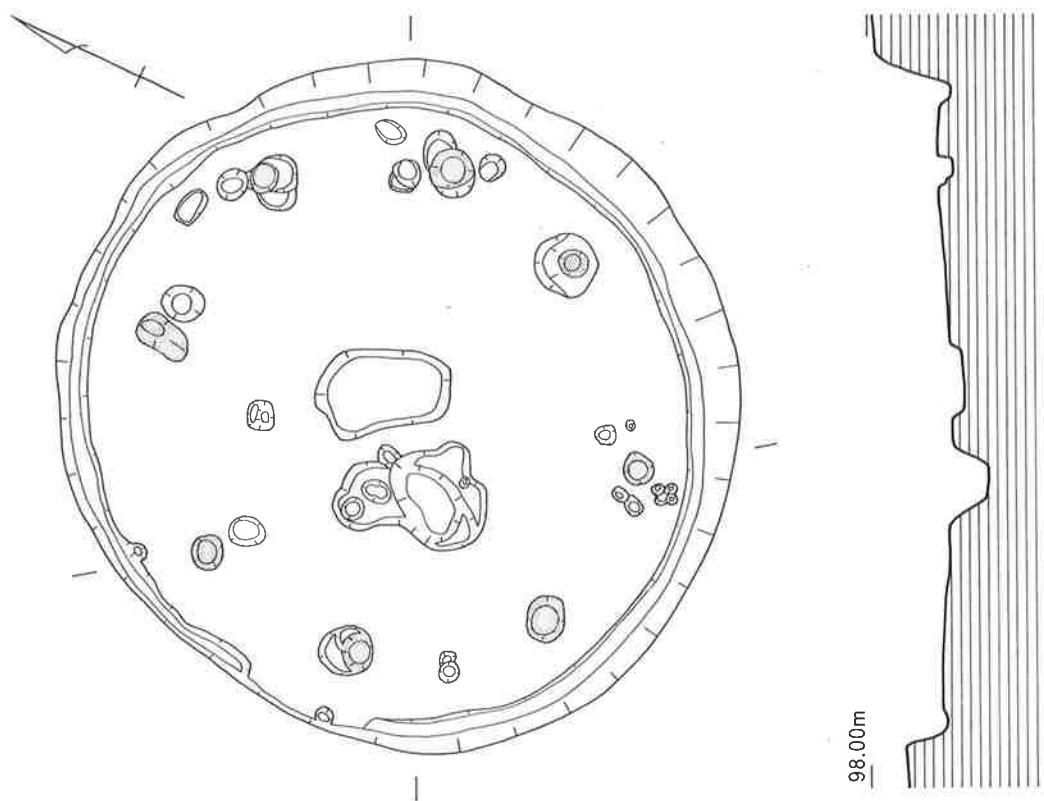
### 1. 遺構

#### 1号竪穴住居跡（第3図）

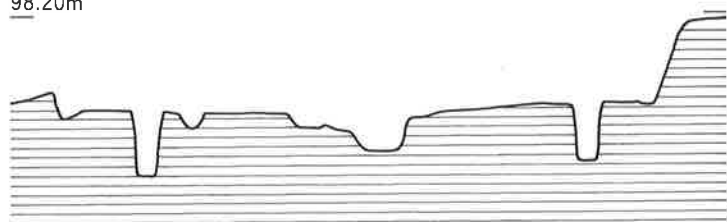
平面形はほぼ円形で、直径は7.04m～7.52mである。壁高は斜面高位側（東）で最大80cm、低位側（西）で17cmである。周囲には周溝をめぐらすが、西側では一部とぎれている。支柱穴は8本で、中央に不整形長方形の炉をもつ。炉の西に不整形の土坑があるが、性格は不明である。遺物は砥石2点が周溝埋土から出土し、北東部の床面直上で数個体の甕や鉢などが出土した。埋土は灰黄褐色の弱粘



第2図 遺構配置と周辺の地形図

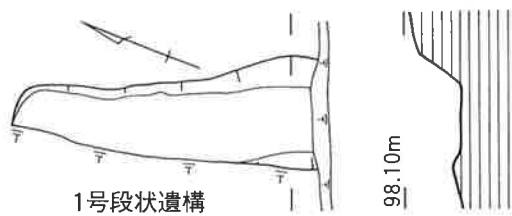


98.20m



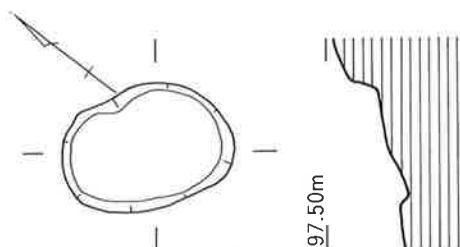
※網かけは支柱穴

1号竪穴住居跡



1号段状遺構

98.10m

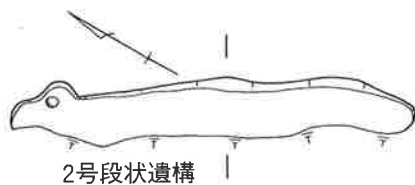


97.50m

97.20m



1号土坑



2号段状遺構

98.00m



第3図 遺構実測図



1号竖穴住居跡完掘 (東より)



1号竖穴住居跡土器出土状況 (西より)



1号土坑, 1・2号段状遺構完掘 (西より)



完掘全景 (南西より)

質土の単一層で、炭の小片を多数含んでいた。中央付近の中位から下位にかけての小範囲で投棄と考えられる炭の集中する部分がみられた。

### 段状遺構 (第3図)

1号段状遺構の南端部は、調査区外に続く。最大幅は1.20 m、壁高は最大で43 cmである。埋土は明黄褐色粘質土の単一層で、出土遺物は皆無である。2号段状遺跡は、全長4.30 m、最大幅55 cm、壁高は最大で30 cmである。埋土は黄褐色粘質土の単一層で、弥生土器の小片が数点出土した。

### 1号土坑 (第3図)

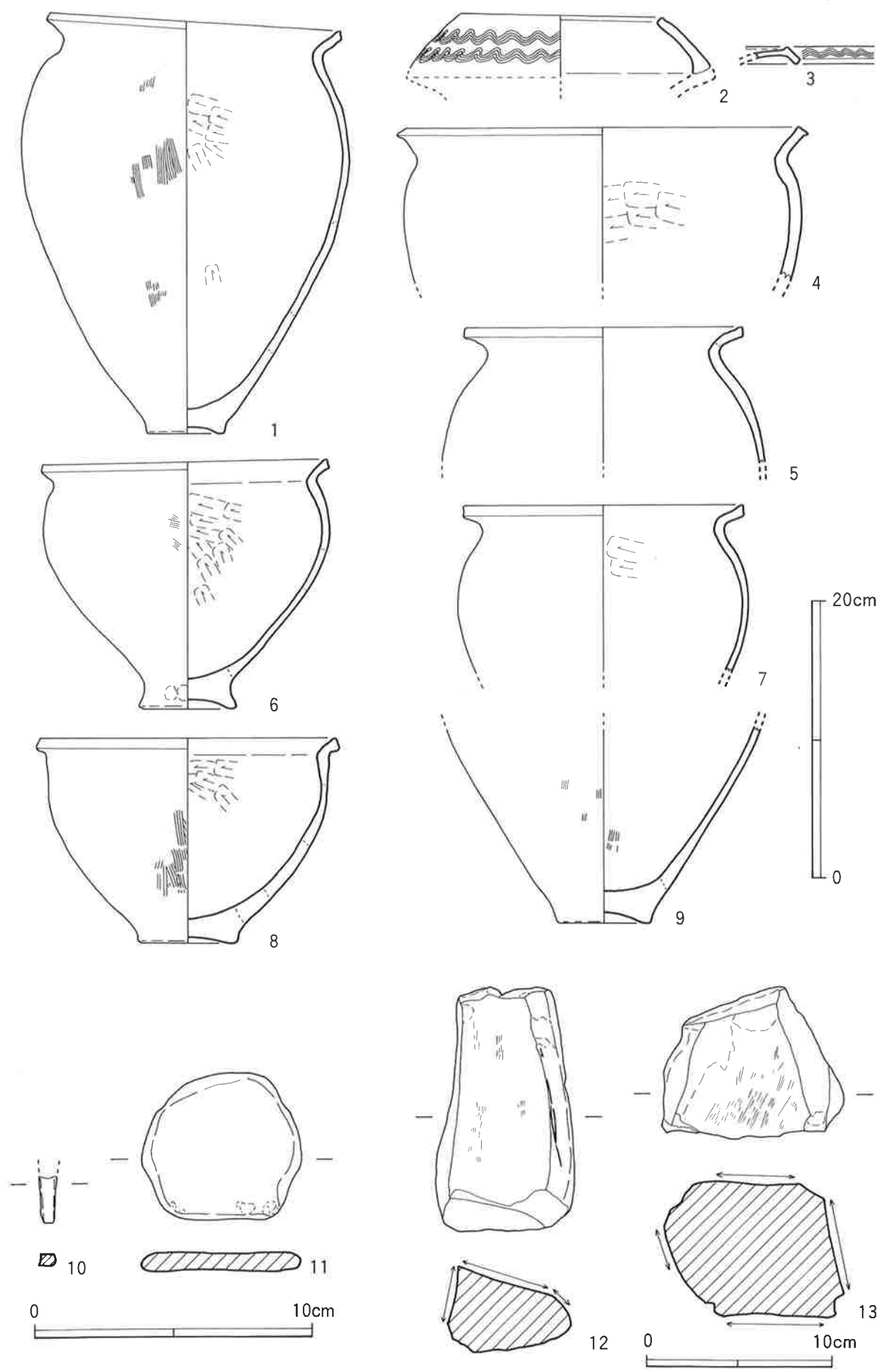
平面形は不整長円形を呈し、長径1.84 m、短径1.28 m、残存最大壁高26 cmである。床面は、中央付近より南西側へ下ってゆく。埋土は明黄褐色粘質土の単一層で、出土遺物は皆無である。

## 2. 出土遺物

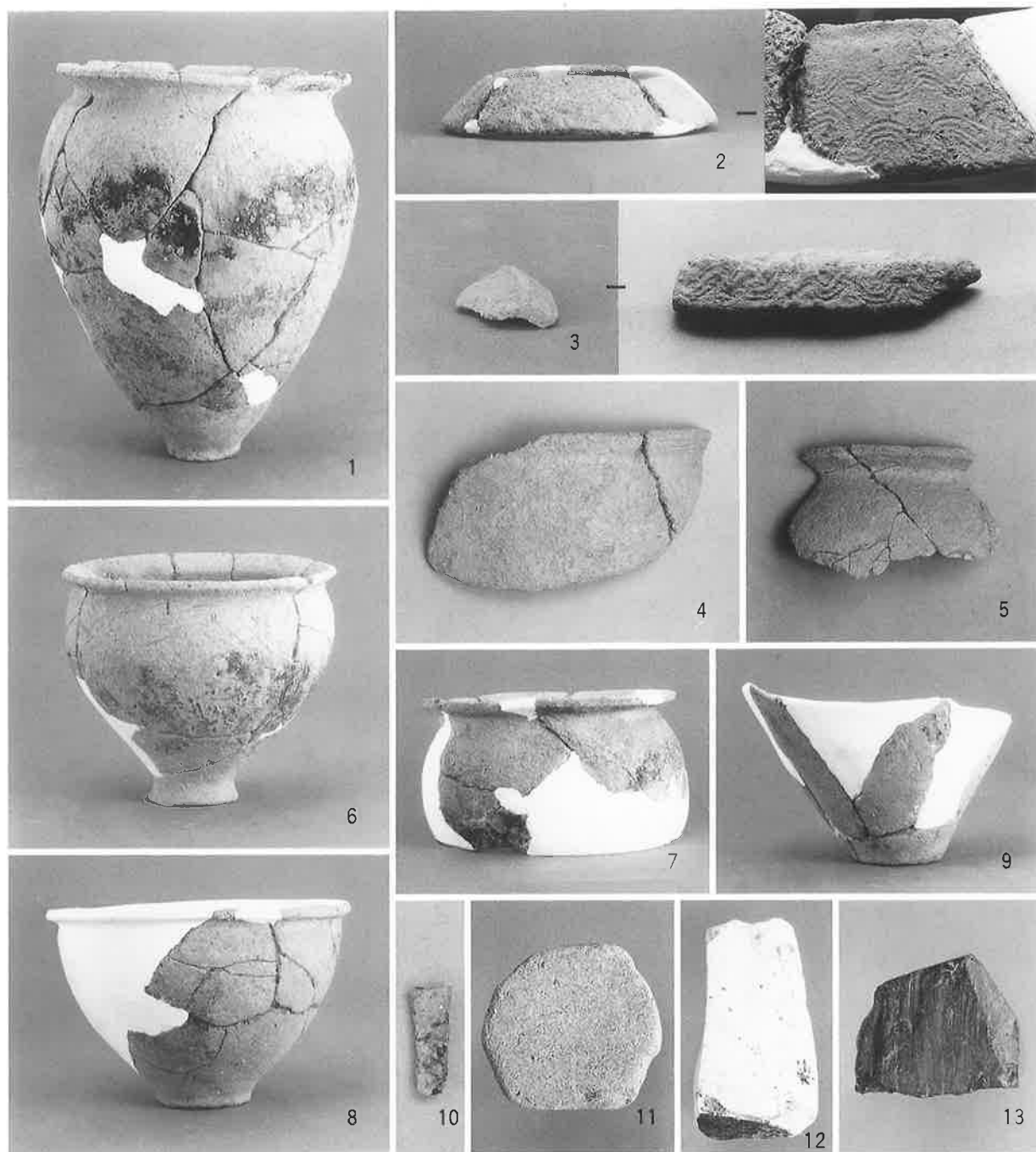
遺物は、弥生土器の小片数点を除いて、全て1号竖穴住居跡より出土した。

### 土器 (第4図)

出土した土器は、全て弥生時代後期のものである。1は甕である。くの字形に外反し端部をややつまみ上げた口縁部に、最大径を上位にもつ胴部が続き、底部はやや上げ底を呈する。器面調整は外面がハケ、内面はヘラケズリである。6・8は鉢で、6は口縁端部を上下にわずかにつまみ出し、8は口縁外面を肥厚させる。いずれも胴部最大径を上位にもち、底部は上げ底をなす。外面はハケ、内面はヘラケズリである。2は複合口縁壺の立ち上がり部である。やや内湾気味に立ち上がり外面に櫛描波状文を2段にめぐらしている。3は器台の受け部である。口唇部を拡張し、外面に櫛描波状文を施している。4は鉢、5・7は甕である。いずれも口縁端部を若干上下に拡張している。内面調整はヘラケズリである。9は甕の底部である。上げ底を呈し、外面には煤が付着する。



第 4 图 1 号竖穴住居跡出土遺物実測図



1号竪穴住居跡出土遺物

**鉄器 (第4図)**

鉄鏃の茎片と思われる。断面形は長方形を呈し、茎幅0.5cm、厚0.3cm、残存長1.7cmである。

**石器 (第4図)**

11は紡錘車の未製品である。石材は四熊ヶ岳産とみられる角閃石安山岩で、器面は研磨され平滑に仕上げられている。穿孔を試みた痕跡は認められない。12は砥石である。石材は凝灰岩で、3面に明瞭な使用痕が認められる。数ヶ所に鋭利な刃物の先端による深い擦痕があり、鉄器の仕上げ砥に用いられたものと考えられる。13は砥石である。石材は泥岩で、4面に使用痕がみられる。部分的に鋭利な擦痕が認められることから、鉄器を研ぐための中砥と考えられる。



1号竪穴住居跡出土甕・鉢

### おわりに

今回の調査では、竪穴住居跡1基と段状遺構2基、土坑1基などを検出した。県東部地域において1号竪穴住居跡出土土器のセットは、熊毛町石光遺跡I地区包含層出土土器と清水遺跡第1・2環壕の出土土器の間に位置づけられ、時期は後期前半に比定できる。

今回の調査区は集落の中心から外れており全貌は明らかでないが、平地との高低差や奥まった丘陵への占地から、高地性集落の一つとみてよいであろう。一般的に、高地性集落については当時の武力抗争との何らかの関連が指摘されている。しかし、瀬戸内海から内陸部に入った地域にまで目前の危機が迫っていたかは、疑問が残る。むしろ、他地域での戦乱の情報に過敏に反応し、万一に備え防御態勢を整えた所産とみる方が妥当であろう。玖珂盆地は後に交通の大動脈山陽道の設置に伴い繁栄するが、前身となる交通路や瀬戸内海に通じる数ルートは当時すでに機能していたと考えられる。高地性集落成立の背景は一元的ではなく各方面からの検討を要するが、玖珂盆地においては他地域の情報をより得やすい状況にあったことが、多数の高地性集落を営ませた一要因と考えたい。

玖珂町埋蔵文化財調査報告 第3集

市井木遺跡

1997年3月

編集 山口県埋蔵文化財センター

発行 玖珂町教育委員会

印刷 泉菊印刷株式会社